

フライベルクのディートリヒにおける 知性の構成的構造

山崎 達也

はじめに

フライベルクのディートリヒ (Theodoricus Teutonicus de Vriberch, 1245/50-1318/20) は、いわゆるドイツ・ドミニコ会士 (die deutschen Dominikaner) に属していた修道士であるが、哲学史的観点からみれば、それだけにとどまらず彼の後継者エックハルトに少なからず影響を与えた注目すべき哲学者でもある。しかしながら、ディートリヒがその後の精神史に与えた功績に関しては、十分に明らかになったとはいえない。というのも、彼の全著作の刊行が『中世ドイツ哲学者叢書』 (*Corpus Philosophorum Teutonicorum Medii Aevi*) の第1巻として1977年になってようやく始められたが、1985年に完成したこともあり、最近になってその研究が盛んになってきたからである。

しかしこうした研究状況にあって、哲学史のなかでのディートリヒの位置に関する研究の先駆けとなったのは、フラッシュ (Flasch, K., 1930-) が1974年に *Kant-Studien* に掲載した論文 *Kennt die mittelalterliche Philosophie die konstitutive Funktion des menschlichen Denken?* である。フラッシュはこの論文のなかで、その表題からもわかるように、カント哲学における認識の構成的機能が中世哲学においても見出されることを提示し、ディートリヒの初期の論考『カテゴリー的実在の起源について』 (*Tractatus de origine rerum praedicamentalium*) において展開される知性の構成的機能について紹介し、この論考の哲学史的意義を詳細に論じている。また、フラッシュの後継者モイジッシュ (Mojsisch, B., 1949-2015) は、1977年に『フライベルクのディートリヒにおける知性論』 (*Die Theorie des Intellekts bei Dietrich von Freiberg*) を著し、ヨーロッパ精神史におけるディートリヒの知性論の位置づけについて論じている。

筆者はこれら両者の研究から大きな刺激を受け、エックハルト研究と並行してディートリヒのテキストに触れてきた。とりわけ知性の構成的機能に関しては注目してきたが、ディートリヒには今あげた論考の後に知性論的著作として『至福直観について』 (*Tractatus de visione beatifica*) と『知性と知性認識されるものについて』

(*Tractatus de intellectu et intelligibili*) という、ディートリヒ哲学における中核的論考がある。ディートリヒの知性論は『カテゴリー的實在の起源について』において明らかになった知性の構成的機能という観点から能動知性と可能知性の概念考察を中心に継承されてきたアリストテレス的伝統にメスを入れ、とりわけ彼独特の能動知性論を展開する。さらには、その知性論から人間の至福を解釈するという最終的な目的が明らかとなる。

しかしディートリヒの知性論の特徴を表出するためには、やはり彼の思想全体のなかで解釈される必要がある。つまり、彼の形而上学的著作たとえば『存在者と本質について』(*Tractatus de ente et essentia*)、『存在者の何性について』(*Tractatus de quiditatibus entium*) を参照し、知性論との連関を考察しなければならない。小論では、ディートリヒ形而上学との連関の考察は十分に反映させることができなかったことをはじめに申し上げておきたい。そこで小論では、今あげた知性論3部作を中心に考察してみたいと思う。

1. ディートリヒは能動知性と可能知性そして両者の関係を いかに理解しているか

ディートリヒはまず、事物と知性との関係において、事物の本質規定の原理を事物の側にはなく、知性の側に求める。このことは、アリストテレスにおけるカテゴリーの枠組みに規定された事物的存在者の総体としての世界が知性に内在している本質規定の原理によって構成されていることが帰結するという意味をもっている。つまりディートリヒの知性論の特色の一つは、構成論的知性論にある。

ディートリヒが知性を構成論的に解釈しようとするモチーフは、あくまでもアリストテレス的カテゴリーの起源を問おうとすることにある。ディートリヒはここではアリストテレス哲学を徹底していく方向に進んでおり、すなわち存在者であるかぎりでの存在者、すなわちアリストテレス的形而上学の対象とはそもそも何であるのか、この問いを解明するためにはカテゴリーの起源を明らかにしなければならないと彼は考えている。

1.1. 存在者の類似あるいは範型としての知性

そこでまず、ディートリヒの『知性と知性認識されるもの』から次の記述を引用することからはじめよう。

「考察されるべきことは、知性であるかぎりのすべての知性は、全存在者あるいは存在者であるかぎりでの存在者の類似、しかもその本質によって類似であるということである。哲学者の『デ・アニマ』第3巻の記述、すなわちすべてを作る

ことができるのが能動知性 (intellectus agens) であり、すべてのものになることができるのが可能知性 (intellectus possibilis) であるとはこのことに基づいている。しかしこのことが可能なのは、一方は現実態としてすなわち能動知性、他方は認識する以前は可能態としてすなわち可能知性であるとはいえ、両知性はその本質からしてすべての存在者の類似だからである。」¹⁾

知性はその本質からしてすべての存在者の類似であるということは、知性はすべてを知性認識できるということを意味する²⁾。ディートリヒによれば、知性はその本質から知性であり、すなわち知性は知性性 (intellectualitas) という本質によって自存する実体なのである。ということは、すべての存在者を認識するというはたらきがそれ自体として知性の対象であり、しかもそのはたらきは自己還帰すなわち自己認識であることを意味する。

知性のはたらきを以上のように解し、その解釈をより先鋭化する方向に知性の構成的構造がはっきりとその姿を現してくる。われわれが現実世界の事物を認識し、その本質を定義する場合、その定義づけというはたらきの始原は知性にあり、すなわち人間知性によって事物の本質定義が可能になり、したがって世界における合理性は知性に還元されるのである。ディートリヒは『カテゴリー的实在の起源について』 (*Tractatus de origine rerum praedicamentalium*) のなかで以下のように述べている：

「ところで次のことも考察されなければならない。すなわち上において仮定され、なんらかの方法によって明らかにされたこと、すなわち第一志向によって類として整序された事物であるなんらかの存在者が知性によって構成されるということである。というのは、上で語られたことは、そのような存在者が、形相的にそして始原から名称によって表示されることに関して、いかなる根拠においても自然のはたらきによるものではないからである。しかし存在者の総体においては、自然あるいは知性のほかにその始原はないのであるから、いまそれが自然ではない以上、知性がこれらの存在者の原因としての始原であることは必然的である。」³⁾

ここで明らかなように、第一志向と呼ばれる事物の存在であっても知性によって構成されるとディートリヒは解している。フラッシュの言葉を借りて表現すれば、ディートリヒは一般的存在論と論理学へと変容してしまったカテゴリー分析を能動知性の形而上学へと変えたのである⁴⁾。

存在者の始原として知性が理解されていることは、知性が存在者全体の類似であるという意味にとどまらず、知性は存在者の範型 (exemplar) であるという解釈を

導くことになる⁵⁾。というのも、知性はその本質の固有性にしたがって普遍的な本性なのだから、知性の対象はこれとかあれとかの存在者の何性 (quiditas haec vel illa) ではなく普遍的な何性、すなわち存在者であるかぎりの存在者の何性だからである。本質による知性は、端的な本質の固有性にしたがうという単一な仕方によって、すべての存在者の知性的な類似性を自己のうちに作り出す。したがって、知性はある意味で知性的な仕方ですべての存在者なのである⁶⁾。

1.2. 魂の実体の始原としての能動知性

知性がすべての存在者であるという命題は、ディートリヒも引用していた『デ・アニマ』第3巻において提示されている能動知性と可能知性との差異という観点から、二様の仕方で捉えられる。すなわち可能知性は可能態において、能動知性は現実態において知的にすべての存在者であることは必然的でなければならない⁷⁾。ディートリヒにおいては能動知性は「その本質からして現実態である知性」(intellectus in actu per suam essentiam)⁸⁾と定義されるが、しかしここで問われるべきことは、両者の関係をいかに捉えるのか、ということである。

まずは能動知性に関してディートリヒは次のように述べている：

「能動知性は魂の実体それ自体を原因づける始原であり、それは実体に即して言えば、ある仕方において生物における心臓のように、内在的な始原であると私は言う。」⁹⁾

そして能動知性と可能知性との関係については次のように述べている：

「能動知性こそが可能知性における可知的形相の、すなわち可能知性の全本質である可知的形相の能動的にしてそれ自体として存在している始原なのである。」¹⁰⁾

たとえばトマスにとって、能動知性はあくまでも魂に属するあるものである¹¹⁾。さらに能動知性は、感覚に起源を有する表象像の質料性を捨象する、常に現実態として存在している知性として措定されたものである¹²⁾。それに対して、ディートリヒにとって能動知性は魂の実体の始原であって、さらに可能知性との関係で言えば、この知性の可知的形相が能動知性にほかならない。能動知性と可能知性との相対関係は、アウグスティヌスで言えば、精神の秘所 (abditum mentis) と外的認識 (exteriora cognitio) に対応し¹³⁾、「創世記」の聖句から言えば、像 (imago) と似姿 (similitudo) にそれぞれ対応する¹⁴⁾。われわれ人間が神の像と似姿に向けて創られていることの啓示は人間における知性的なものに即して解釈され、人間が能動知性と可能知性を有していることの意味として理解される。ここに見られるのは、啓示

とアリストテレス哲学とのアウグスティヌスの媒介による連関であり、しかしその連関はやはり新プラトン主義的コスモロジーによって有機的色彩を帯びている。すなわち、プロクロス『神学綱要』命題146¹⁵⁾に見られる、そのはじめがその終わりに類似していることによる神的なものの発出における円環構造、さらに同じく命題147¹⁶⁾に見られる神的段階における下位のものの上位のものへの類似、そしてここから導き出される神的段階における類似的連続性である¹⁷⁾。神とのこうした有機的連関は、すべての存在者が神的善性を分有することによって直接的に神に還帰するという構造の基礎をなしている¹⁸⁾。ということは、能動知性は神が人間のうちに直接的に植えつけた最高のものすなわち神の像であって、能動知性の働きによって人間には神の直観が可能であり、神へと直接的に近づくことができることが帰結する¹⁹⁾。

1. 2. 1. 能動知性の対象と本質的原因論

ここで能動知性の対象について考えてみたい。ディートリヒによれば、すべての存在者はその第一の始原である神的存在から発出してくるのであるが、知性とそれ以外の存在者とはその発出の仕方が異なる。ここでディートリヒは存在者の第一の区別に言及している。すなわち実在的存在者と観念的存在者 (ens conceptionale) である。後者の存在者とは、自己が知ることを知り、自己が知るものを知る存在者である。そのことによって自己自身へと還帰し、自己意識としての自己を獲得する。この存在者に属する第一のものが、自らの本質によって最も卓越した仕方で認識する能動知性であり、次に、ある事物をその諸原理において命題として定義しつつ把握する可能知性である。

さて、能動知性の対象は、その知性の発出の仕方に基づいて規定される。すなわちディートリヒによれば、自然的事物は神のうちにある範型的あるいは理念的形相に規定されて神から発出してくるが、能動知性は存在者の総体の規定であるかぎりのいわゆる神的規定から発出してくる。つまり、自然的事物は理念的形相に規定されることによって、すなわち類と種に限定されるのであるが²⁰⁾、しかし自らの本質によって現実態として存在している能動知性は発出において類や種に限定されることはない。能動知性の発出における規定は、自己のうちに存在者としての存在者全体の類似性を有している²¹⁾。したがって、能動知性は存在者であるかぎりの存在者全体の類似性にしたがって神から発出し、そのことによって能動知性は自己が発出してくる始原すなわち神に関係し、そしてその関係において能動知性の持つ包摂性によって存在者総体にも関係する²²⁾。ここで言われる関係とは能動知性における認識のあり方を意味し、すなわち能動知性は唯一の「直観」(intuitus) によって自己の始原を認識し、存在者総体を認識するのである²³⁾。

以上のことから能動知性の三つの対象が導き出される。すなわち、第一の対象

は、能動知性が認識することによって発出し、そこにおいて自己の本質の受容が成立する始原である²⁴⁾。第二は自己の本質であり、そして第三の対象は、能動知性が包摂することによって認識の観点から全体として把握する存在者の総体である²⁵⁾。ところで能動知性の対象が三つあるといっても、そこに異なった三様の認識方法があるわけではない。ディートリヒはその根拠を説明するさいに『原因論』の命題7と命題14に依拠している。すなわち、「知性体はすべて、自身より上位のものと下位のものを知っている。しかし、自身より下位のものを知っているのは、[自身が] それにとって原因だからであり、自身より上位のものを知っているのは、そこから諸善を獲得するからである」²⁶⁾、さらに「自身の本質を知るところの知るものはすべて、完全な還帰によって自身の本質へと変えるものである」²⁷⁾。上位のものと下位のものとの間にある中間者は上位のものを自己の原因として認識し、下位のを自己が原因づけたものとして認識するという見解は、いわゆる本質的原因論 (causa essentialis)²⁸⁾ を基礎としている。つまり、たとえば中間者が上位のものを認識するということは、その中間者の認識の仕方ではなく、上位のものの認識の仕方に基づいて行われる。そして中間者のはたらきは上位のものと下位のをとを連結するいわば媒介作用として機能し、中間者と下位のものとの共通の始原に還帰することになる。

それでは次に能動知性の認識行為それ自体に注目してみよう。能動知性が三つの対象を唯一の認識活動によって認識することは先ほど述べたが、その認識の構造はいかなるものであるのか、という問いから考えてみたい。ディートリヒは始原を対象として認識することが最も基礎的なことであると述べているが²⁹⁾、その理由は能動知性が始原を認識する認識作用が始原自身の認識規定に基づいているからである。つまり始原それ自身が自己を認識することによって、自己の本質のあり方と規定性によって他者をも認識するように、能動知性が自己の始原を認識する、その認識作用には他の二つの契機すなわち自己の本質と他者の認識の契機が含まれている³⁰⁾。ここにおいてもすなわち、ディートリヒが本質的原因論を基礎構造とする新プラトン主義的コスモロジーの秩序のなかで認識論を組み立てていることが理解できる。

以上のことから明らかになることは、能動知性が自己以外のものは認識しないということである。というのは、能動知性は自己の本質と自己に内在している始原あるいは原因のみを認識するからであり、また認識する他のすべてのものを自己の本質に固有のあり方にしたがって、自己の本質によってのみ認識し、あるいは能動知性は他のすべてを始原のあり方にしたがってその始原においても認識するからである³¹⁾。したがって、先述したように、能動知性における認識作用とは自己の始原それ自体への還帰にほかならない。

1.3. 純粹可能態としての可能知性

さてここからは、ディートリヒの可能知性の解釈をみていくことにしよう。先述したように、能動知性は「精神の秘所」そして「神の像」と同一視され、そして魂の実体の始原として捉えられている。つまり能動知性は自己の本質によって常に現実態として存在している実体であることを意味する。しかし言うまでもないことであるが、能動知性に関するこのような性格を可能知性に適用させることはできない。ディートリヒはその理由として、可能知性が純粹に可能態における存在者であり、認識する前は存在するいかなるものでもないからだと述べている³²⁾。これに続いてディートリヒは、可能知性の有するあるいは有しうる存在が他者を經由してもたらされていること³³⁾、すなわちその存在が他者によってもたらされているもの、それが可能知性であると解釈している。

可能知性が純粹なる可能性であるということは、認識する以前は存在するものに属するものではなく、いわば純粹なる無であることを意味している。したがって、可能知性が現実態として存在することは、自己自身においては不可能であって、他者によって存在が付与されることを意味する。つまり、可能知性においてはいわば実体形相のようなものによって形相づけられることによって存在が付与され、それによって現実的に認識することが可能になる。可能知性に対するこうした解釈はアリストテレスの『デ・アニマ』に端を発し、中世ラテン世界においても有効に機能していた。しかしここで問題とすべきは、可能知性にその存在を付与する他者とは何者であるか、ということである。たとえば、トマスにおいてはその他者は可知的スペキエス (*species intelligibilis*) といえるであろう。トマスによれば、人間知性における認識作用の起源は感覚作用にある。その感覚作用は自然的事物の可感的スペキエス (*species sensibilis*) の実現によって成立し、それが知性認識へといたるプロセスのなかで可感的事物の表象像 (*phantasma*) からその質料性 (*materialitas*) が能動知性の抽象作用によって捨象される段階において可知的スペキエスが実現する³⁴⁾。この可知的スペキエスは、可能知性がそれによって事物を認識する形相であり³⁵⁾、その実現をもって認識がそれ自体として成立するいわば認識原理なのである³⁶⁾。

それに対してディートリヒは、先述したように、可能知性に存在を付与する他者は能動知性であると解している。可能知性にとって能動知性は原因の位置にある。両知性における関係性は形相—質料関係として描写できる。「すべてのものになる」という可能知性の性格によれば、可能知性はその可能態においてすべてのものを認識していることとして解される。このことから、能動的始原が基体としての質料に関係するように、能動知性は可能知性をすべてのものを認識するものにさせるというはたらきを持って可能知性に関係していると言うことができる³⁷⁾。それでは能動知性が可能知性の原因であることはいかなる意味を持っているのか、この問いを以

下において考えてみよう。

1.3.1. 可能知性の本質的原因としての能動知性

能動知性が可能知性を原因づけるといっても、それは道具的あるいは付帯的に原因づけるわけではない。能動知性が道具として原因づけるということは、能動知性が他者によって動かされるということの意味する。つまり能動知性が道具として他者によって認識されるものをわれわれ人間のうちに作るということである。これは、能動知性が自己自身のうちに他の認識を受け入れることによって道具として動かされることを意味する。ということはその運動のプロセスは、能動知性が自己自身のうちにある他者による認識を実現するプロセスであり、それはすなわち可能態から現実態への移行を意味することにほかならない。しかしこれは、自己の本質によって存在しているという能動知性の定義からしてありえないことである。したがって、能動知性は認識されるものの本質的原因であることが帰結される。

本質的原因の固有性と本性は、自らが原因づけたものを自己のうちにあらかじめ有し、さらに能動的なものは受動的なものよりも高貴であり、始原は質料よりも高貴であるというアリストテレスの見解³⁸⁾に基づいて言えば、本質的原因は原因づけたものを、それ自体においてよりも卓越した仕方では自己のうちに有している。したがって、可能知性によって認識されるものは、それが可能知性それ自体のうちにある状態よりも先行しかつより卓越した仕方では能動知性のうちに実在していることが導かれる³⁹⁾。そもそも能動知性は存在者総体の範型なのだから、その能動知性が可能知性にとっては自己の存在を形成する形相として機能することは、可能知性が現実態として実際に認識作用を行うことを意味することになる。ということは、ディートリヒの知性論においては可知的スペキエスをいかに捉えているのか、という問題が生じてくる。というのも、ディートリヒは可能知性の認識行為において可知的スペキエスは不可欠であることは否定していないからである。しかし先ほども触れたように、トマスの場合とは異なり、ディートリヒは可知的スペキエスの起源が可感的事物にあることは認めない。なぜなら、もしそうであるならば、能動知性が可能知性の本質的原因であることは不可能になってしまうからである。そこで以下においてディートリヒにおける感覚作用と知性による認識作用との相違に関して言及してみよう。

1.3.2. 感覚作用と知性認識との相違性

ディートリヒは、感覚とはなんらかの作用を受けることであるというアリストテレスの見解⁴⁰⁾に基づいて、感覚作用の原因としての機能が対象の側にあるとしたうえで、感覚能力がその固有の対象に対して有する秩序と知性がそれに固有の対象に対して有する秩序との間には類似性はないと解している⁴¹⁾。感覚による把握能力

は対象の規定を有するものによって動かされるものであり、そしてその対象が有する自然的な動きが媒介的に感覚器官へと達して表象へといたる。身体的器官である感覚器官は最も外側にあるものであり、そのことによって感覚と表象の形相はより形相的でより内面的な始原に求められる。ディートリヒはその形相を「生命的始原」(vitale principium)と呼んでいる。すなわち、この始原によって感覚と表象は現実態となる。こうした現実態へのプロセスは、運動と感覚にいわば道具としての役割を演じるために神経(nervus)へと降下し、生命的始原を出発点とする精神の媒介のもとに生じる⁴²⁾。つまり感覚作用の場合、その形相を形成する能力および形成された形相それ自体も身体的能力である点を考慮すれば、その形相は可感的なものに由来するある種の運動の結果として感覚器官のなかに生じるのであるから、この可感的なものは原因としての規定を有しているとディートリヒは結論づける⁴³⁾。

対象としての可感的なものと感覚との関係と知性とその認識対象との関係との間には、先ほども指摘したように、なんら類似性は見出されないのであれば、後者の関係における秩序を浮き彫りにすることによって、ディートリヒの知性論における独自性を明らかにすることができる。

知性認識の場合、感覚の場合とは異なる把握の類的規定に基づいている。すなわちその規定根拠は、対象によって動かされるのではなく、端的な形相であるということに存している。そしてその形相は、対象に固有な始原が対象それ自体として規定されるかぎりにおいて認識原理である。すなわち対象はその始原から自己に固有な規定性にしたがってまさに《対象》として構成され、そのことによって対象は認識可能なものとなる⁴⁴⁾。このように対象を構成することが同時にその対象を認識することを意味する。つまり知性認識においては、対象は前提とされるのではなく、むしろ対象は認識作用においてまさに《対象》として固有な規定をもち始めるということである。ディートリヒによれば、このように把握する力が知性であって、すなわち知性はその対象に関して原因としての機能的規定性を有しているのである⁴⁵⁾。

以上のことによって明らかになったように、対象は知性認識の原因ではない。ディートリヒはこのことの理由として二つあげている。第一には、知性は物体ではなく、また身体能力ではない以上、知性は対象の動きによって到達されるものではないからである。第二には、対象は認識作用のなかで対象としての固有な規定を持ち始めるからである。ところでディートリヒは、《何であるか》(quid est)を知ることが知性の知であるというアリストテレスの見解⁴⁶⁾に依拠して、事物がそれによってそれ自体として存在するところのもの、すなわち事物の何性(quiditas)が可能知性の第一の対象であると述べている⁴⁷⁾。知性が対象としてこの何性を把握するのは、知性がただ自己に固有な始原を識別し規定することによってのみ可能になり、ディートリヒによれば、このことだけが《知性認識する》(intelligere)、すなわち

《事物のこのような始原の規定にしたがって事物を把捉する》ということの意味している⁴⁸⁾。

このことによってディートリヒが指摘するのは、実体の観念 (*intentio substantiae*) をあらゆるものから取り除き露わにする思考力 (*vis cogitativa*) と認識能力 (*vis intellectiva*) を区別することである。つまりディートリヒによれば、実体の観念は実体のもとにあってもいかなる付帶的裝飾から露わなものであり、能動知性によってその形相が可能知性のうちで形成されるという態勢に存している。事物にはその形相によって事物に固有な始原が規定されるが、そのことによって形相は何性の規定性を有し、事物自体は何性としての存在 (*esse quidditativum*) を有するのである。そしてこのことが認識能力における対象の本来の規定にほかならない⁴⁹⁾。

ここから明らかになることは、事物とその内的始原との関係そして知性と認識の始原との関係という両関係の間に比例性が存していることである。そして知性は事物の内的始原を何性として規定することによって、その始原から事物それ自体を構成する。このことが、知性が事物の作動的原因であることを意味し、そして知性の本来のはたらきにはほかならない。ディートリヒは作動因を目的因との比較において、後者が志向的原因であるとし、前者は存在者に基づいて存在者に内在している始原を規定し、その始原から存在者自体を構成する原因として理解している⁵⁰⁾。つまり作動するものは、存在者にそれに固有な始原を現実的に規定する始原の本質的な機能を有し、それは始原から存在者を構成するためである⁵¹⁾。つまり知性が存在者を構成することは、知性が作動因として存在者を原因づけるということの意味する。

2. エックハルトとの連関

ディートリヒは『知性と知性認識されるもの』のなかで次のように述べている。

「知性的なものの領域においてはしかし、受動的なものに関わるはたらき、受動それ自体であるはたらきは、現実態となった可能知性の業である。というのは、認識とは、哲学者によれば、ある種の受動だからである。このことは可能知性に関しては真であるが、しかしその場合、知性は(自然的)事物であり自然的な受動であるかぎりにおいてである。しかし知性が観念的存在者 (*entes conceptionalia*) の類に属する存在者であれば、その知性は事物にその事物の始原を観念的 (*conceptionaliter*) に規定するかぎり、つまりその事物それ自体にその始原から構成するかぎり、知性は規定と能動的始原の力を有している。このことは以下のことにもいえることである。すなわち自然的事物の観点から見れば、存在者ではなく無ともいえるものであっても、理性の業 (*opus rationalis*) によって

存在者になるということである。つまり非存在者や無であっても、論考『カテゴリーとして規定された実在の起源について』のかで論じたように、時間やその他によって明かとなるカテゴリーとしての類に属するものに秩序づけられた第一志向的事物 (res primae intentionis) となるのである。⁵²⁾

知性の構成的機能は非存在者や無をもカテゴリー的に規定された存在者へとする。ここで取り上げられているのは時間であるが、他の個所では関係もその例のなかに入っている。つまり時間や関係は事物としては存在していない。それを第一志向として構成する知性は、そもそも「存在者」とはいえない。つまり知性が観念的「存在者」と表現されるのはアナログ的言い回しであって、知性は「存在者」と「非存在者」という区別を超越している。たとえば白いものを白くしている白さそれ自体は白くないのと同様、存在者をその始原から本質規定する知性は存在者の本質規定を有していない。

ディートリヒによって明らかにされた知性における非存在者という性格を思弁神学的領域に適用したのがエックハルトである。エックハルトは、周知のように、初期の著作『パリ討論集』(Quaestiones Parisienses) 第一問題「神においては存在することと知性認識することとは同一であるか」(Utrum in deo sit idem esse et intelligere) のなかで、次のように述べている。

「神が存在するから神は知性認識するとは私には思えない。むしろ神は知性であり知性認識であって、知性認識それ自体が神の存在の基盤である (ipsum intelligere est fundamentum ipsius esse) ように、神が知性認識するから神は存在するというように思える」⁵³⁾

ディートリヒにおいて知性が存在者ではないとする「存在」、そしてエックハルトが神から排除した「存在」、これら2つの存在概念を両者は、共通の資料から取っている。それはすなわち『原因論』第4命題「創造された諸事物のなかで第一の事物は存在であり、存在以前に創造されたものは他にない」である。つまり両者は「存在」を有限的なものとして限定して使用している。

さらにエックハルトは関係については次のように述べている。

「関係 (relatio) はしかし、そのすべての存在を魂から所有しており、このようなものとしてそれは実在的カテゴリー (praedicamentum reale) であるが、それはちょうど、時間がその存在を魂から有しているとはいえ、それにもかかわらず実在的カテゴリーとしての量の一種であるのと同様である。」⁵⁴⁾

ここにはディートリヒの思想が厳然と反映されていることは疑えないであろう。しかしエックハルトは、神における存在否定をそのまま継続して保持するのではなく、後期になって形成される第一命題「存在は神である」に明らかのように、超カテゴリー的概念である存在を神の固有性として理解し、エックハルト独特の存在論を構築することになる。

注

- 1) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 1; ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 146, 5-12: Est igitur considerandum, quod omnis intellectus in quantum intellectus est similitudo totius entis sive entis in quantum ens, et hoc per suam essentiam. Et super hoc fundatur dictum Philosophi in III *De anima* (430a14-15), scilicet quod intellectus agens est, in quo est omnia facere, intellectus possibilis, in quo est omnia fieri. Quod quidem contingit ex hoc, quod uterque istorum intellectuum est per essentiam similitudo omnium entium, quamvis unus eorum secundum actum, scilicet intellectus agens, alter secundum potentiam ante intelligere, scilicet intellectus possibilis.
- 2) 知性はすべての存在者の類似であるとの表現は、エックハルトの『創世記註解』(*Expositio libri Genesis*) 第115節にも見られる。すなわち「知性はそれゆえ、知性それ自体としては、全存在者の類似であり、存在者の総体を自己のうちに含んでいるのであって、これとかあれとか切り離しているわけではない」(*In Gen.* I n. 115; LWI, 272, 3-5) と述べられている。
- 3) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentalium* 5(1); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 181, 5-11: Considerandum autem et hoc, quod supra suppositum est et aliquo modo ostensum, scilicet quod entia aliqua, quae sunt res primae intentionis ordinabiles in genere, constituuntur per intellectum. Dictum est enim supra, qua ratione huiusmodi entia quantum ad id, quod formaliter et principaliter significatur per nomen, non possunt esse ab actu naturae. Cum autem non sit principium in universitate entium nisi vel natura vel intellectus, si natura non est, necesse est intellectum esse horum entium causale principium.
- 4) Flasch, K., Kennt die mittelalterliche Philosophie die constitutive Funktion des menschlichen Denkens? Eine Untersuchung zu Dietrich von Freiberg, *Kant-Studien* 63, 1972, 205.
- 5) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.4, (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 28, 2-3: intellectus per essentiam est exemplar.
- 6) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.4, (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 28, 7-29, 13: Quod manifestum est ex obiecto eius, quod est quidditas

- non haec vel illa, sed universaliter quaecumque quiditas et ens in quantum ens, id est quodcumque rationem entis habens. Quia igitur eius essentia, quidquid est, intellectualiter est, necesse ipsum intellectum per essentiam gerere in se intellectualiter similitudinem omnis entis, modo tamen simplici, id est secundum proprietatem simplicis essentiae, et ipsum esse intellectualiter quodammodo omne ens.
- 7) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.4, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 29, 14-21: Quod quidem contingit dupliciter: uno modo in potential seu potentialiter, ut in intellectu possibili, in quo est omnia fieri, secundum Philosophum in III *De anima*, alio secundum actum, puta in intellectu agente, in quo est omnia facere. Alias enim, nisi uterque istorum intellectuum esset quodammodo et intellectualiter omne ens, ille quidem in potential, scilicet intellectus possibilis, hic autem, id est intellectus agens, in actu, impossibile esset hunc quidem omnia facere, id est intellectum agentem, in illo autem omnia fieri, id est intellectu possibili.
- 8) Theodoricus de Vrberch, *De intellectu et intelligibili* I 3 (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 138, 34.
- 9) Theodoricus de Vrberch, *De intellectu et intelligibili* II 2 (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 147, 50-52: intellectus agens est principium causale ipsius substantiae animae, principium, inquam, secundum substantiam aliquo modo intrinsecum sicut cor in animali.
- 10) Theodoricus de Vrberch, *De intellectu et intelligibili* II 2 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 147, 53-55: ipse intellectus agens est activum principium et per se formae intelligibilis in intellectu possibili, quae forma intelligibilis est tota essentialis intellectus possibilis.
- 11) Thomas de Aquino, *Summa Theologiae* I qu. 79 art. 4 co.: Respondeo dicendum quod intellectus agens de quo philosophus loquitur, est aliquid animae.
- 12) Thomas de Aquino, *Summa Theologiae* I, qu. 79 art. 3, co.: Oportebat igitur ponere aliquam virtutem ex parte intellectus, quae faceret intelligibilia in actu, per abstractionem specierum a conditionibus materialibus. Et haec est necessitas ponendi intellectum agentem.
- 13) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de visione beatifica* Prooemium, (5); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 14, 44-47: qui (philosophus) distinguunt in intellectuali nostro intellectum agentem ab intellectu possibili, ut idem sit intellectus agens apud philosophos, quod abditum mentis apud Augustinum, et intellectus possibilis apud philosophos, idem, quod exterius cogitativum secundum Augustinum.
- 14) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.1, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 15, 22-26: Quod ergo dicitur ad similitudinem, hoc pertinet ad exterius

- cogitativum seu intellectum possibilem et ea, quae sui dispositioni subsunt. Quod autem dicit ad imaginem, quae consistit in aeternitate et unitate trinitatis, refertur ad abditum mentis seu intellectum agentem, quo substantia animae figitur in aeternitate.
- 15) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 146; Vansteenkiste, 508: Omnium divinatorum processuum ad sua principia assimilantur, circulum sine principio et sine fine salvantes per conversionem ad principia.
 - 16) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 147; Vansteenkiste, 508: Omnium divinatorum ornatum summa ultimis assimilantur superpositorum.
 - 17) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 147, comm.; Vansteenkiste, 508: Si enim oportet continuitatem esse divini processus et propriis medietatibus unumquemque ordinem colligari, necesse summitates secundorum copulari finibus primorum. Copulatio autem per similitudinem. Similitudo ergo erit principiorum submissi ordinis ad ultima superlocati.
 - 18) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* Prooemium, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 13, 28-14, 30: ens quodcumque, quod quantum ad summum gradum suae perfectionis in Deum immediate reducitur secundum participationem divinarum bonitatum.
 - 19) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* Prooemium, (6); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 14, 54-56: ipse (intellectus agens) est illud supremum, quod Deus in natura nostra plantavit, et ideo, ut praemissum est, secundum ipsum immediatam approximationem ad Deum sortimur in illa beata visione.
 - 20) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 36 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 174, 100-105: Res enim aliae ab intellectu procedunt a Deo secundum rationem, quae est forma exemplaris alicuius determinatur ens quodcumque ad aliquod determinatum genus vel sepeciem secundum determinatam rationem talis formae exemplaris in Deo.
 - 21) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 36 (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 174, 106-108: Ratio autem, a qua procedit intellectus per essentiam in actu eo modo, ..., non est ita determinati generis seu respectus sed gerit in se similitudinem totius entis in quantum ens.
 - 22) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 36 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 174, 108-110: Et ideo talis intellectus procedit a Deo in similitudinem totius entis in quantum ens et suo ambitu respicit universitatem entium sicut et suum principium, unde procedit.
 - 23) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 36 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 175, 112-114: uno intuitu cognoscendo suum principium et sic

procedendo ad esse cognoscit totam universitatem entium.

- 24) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 37 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 175, 3-5: primum et principale est suum principium, a quo procedit intelligendo, in quo consistit suae essentiae acceptio.
- 25) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 37 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 175, 10-11: universitas eintium, quam totam suo ambitu comprehendit quantum ad suam cognitionem.
- 26) *Liber de causis*, prop. 7 (8); Pattin, 152: Omnis intelligentia scit quod est supra se et quod est sub se : veruntamen scit quod est sub se quoniam est causa ei, et scit quod est supra se quoniam acquirit bonitates ab eo.
- 27) *Liber de causis*, prop. 14 (15); Pattin, 167: Omnis sciens qui scit essentiam suam est rediens ad essentiam suam reditione completa.
- 28) ディートリヒは論考『分離された存在者、とくに分離された魂の認識について』(*De cognitione entium separatorum et maxime animarum separatorum*) 第23節において、あるものがあるものにとっての本質的原因であることに対して必然的である5つの条件を提示している。すなわち1. 実体であること、2. 生ける実体 (substantia vita) であること、3. 本質的に (essentialiter) 生ける実体であること、4. その本質によって生きている生命は知性的生命 (vita intellectualis) であること、5. この知性的生命は現実態における知性であること、である。ディートリヒの本質的原因論はエックハルトにも少なからず影響を与えているが、エックハルトの場合、それは本質的始原 (principium essentiale) 論という体裁をとっている。なお、本質的原因論をめぐるディートリヒとエックハルトとの関係については以下の文献を参照されたい。

Mojsisch, B., „Causa essentialis“ bei Dietrich von Freiberg und Meister Eckhart, *Von Meister Dietrich zu Meister Eckhart*, Beihefte zum *CPTMA* Bd. 2, S. 106-114.

拙論「エックハルトにおける causa essentialis 論の受容とその変容」水地宗明監修、新プラトン主義協会編、『ネオプラトニカⅡ 新プラトン主義の原型と水脈』、2000年、昭和堂、266-292頁。
- 29) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 38 (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 176, 40-41: in quo tamen principalissimum est in ratione obiecti intelligere causam suam sive principium, a quo procedit.
- 30) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 38 (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 176, 41-44: quia includit alia duo, quae intelliguntur in ipso principio secundum modum principii, sicut etiam ipsum principium intelligendo se intelligit etiam alia secundum modum et rationem suae essentiae.
- 31) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 40 (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 177, 72-77: intellectus agens et omnis intellectus, qui est intellectus in

actu per essentiam, nihil intelligit extra se, quia non intelligit nisi essentiam suam et suum principium sive causam suam, quae est intima sibi, et quidquid aliud intelligit, non intelligit nisi per essentiam suam secundum modum proprium suae essentiae, vel etiam intelligit illud in suo principio secundum modum ipsius principii.

- 32) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.1, (4); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 16, 29-30: cum sit ens pure in potential et nihil eorum, quae sunt, antequam intelligat.
- 33) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.1, (4); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 15, 32-33: ipse potius est res delata super aliud, per quod sustentatur in esse, quod habet vel habere potest.
- 34) トマスは、知性を現実態にするためには、表象像からその質料性を抽象し、可知的スペキエスを取り出す力を知性の側に求めなければならないとし、能動知性措定の必要性を説いている。
『神学大全』第1部第79問題第3項主文を参照。
- 35) Thomas de Aquino, *Summa Theologiae* I qu. 85 art. 2 co.: species intelligibilis se habet ad intellectum ut quo intelligit intellectus.
- 36) Thomas de Aquino, *Summa Theologiae* I qu. 85 art. 2 co.: similitude rei intellectae, quae est species intellegibilis, est forma secundum quam intellectus intelligit.
- 37) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 2.1. (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 63, 6-10: Intellectus enim agens se habet ad possibilem sicut principium activum ad subiectam materiam, in quantum intellectus possibilis consideratur ut ens potentia omnia intellecta, in quo est possibile omnia fieri. Intellectus autem agens potens est omnia facere intellecta.
- 38) アリストテレス、『デ・アニマ』第3巻第5章430a19。
- 39) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.2.1. (4); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 23, 5-6: Igitur multo magis in intellectu agente quam in intellectu possibili.
- 40) アリストテレス、『デ・アニマ』第2巻第11章424a1。
- 41) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentaliu*m 5 (23); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 186, 174-175: Sed dicendum, quod non est similes ordo huiusmodi virtutum et intellectus ad sua obiecta.
- 42) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentaliu*m 5 (24); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 186, 179-183: Quo fit, ut huiusmodi organa sint in ultima dispositione, ut in eis fiat forma sensus in actu et phantasiae ab aliquot formaliore intrinseco vitali principio mediante spiritu decurrente in nervis, qui ab huiusmodi principio oritur, ut sit instrumentum motus et sensus.

- 43) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (25); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 187, 194-198: Si autem alio modo se habet, ut dictum est, tunc, quia tam virtutes efficientes has formas quam ipsae formae effectae sunt virtutes in corpore et organicae nec fiunt in organis nisi secundum modum motionis factae a sensibilibus in eodem organo, secundum hoc ipsa sensibilia habent rationem causae respectu earum.
- 44) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (26); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 187, 209-213: Est autem et aliud genus apprehensionis, cuius ratio non consistit in moveri ab aliquot obiecto, sed in essendo aliquam formam simplicem, quae sit cognitionis principium in eo, quod determinantur propria principia ipsi obiecto, ex quibus constituatur secundum propriam rationem obiecti et quo cognoscibile sit.
- 45) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (26); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 187, 213-214: Et haec virtus apprehensiva est intellectus, qui secundum hunc modum habet modum et rationem causae respectu sui obiecti.
- 46) アリストテレス、『デ・アニマ』第3巻第6章430b27-29。
- 47) Theodoricus de Vrberch, *De intellectu et intelligibili* III 16 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 189, 29-32: obiectum intellectus possibilis secundum Philosophum est quiditas, et hoc primo et maxime per se. Est autem quiditas id, quo res est secundum actum formalem id, quod est.
- 48) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (26); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 187, 224-226: Hoc enim solum est intelligere, scilicet apprehendere rem secundum talium principiorum eius determinationem.
- 49) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (26); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 188, 231-233: Et ex hoc iam habet forma rationem quiditatis et ipsa res esse quiditativum. Et haec est propria ratio obiecti virtutis intellectivae.
- 50) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (15); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 184, 95-98: Non enim est causa per intentionem, ut dictum est de causa finali, sed magis, ut sic loquar, executive determinat enti sua intrinseca principia et ex ipsis ens ipsum constituit.
- 51) Theodoricus de Vrberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (15); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3; 184, 108-109: (efficiens) habet rationem principia active determinantis enti sua principia et ex ipsis constituendo ipsum ens.
- 52) Theodoricus de Vrberch, *De intellectu et intelligibili* I 2 (3); ed. Mojsisch, B.,

CPTMA. II, 1; 137, 2-30.

- 53) Quaest. Par. I, n. 4; LW V, 40, 5-7: non ita videtur mihi modo, ut quia sit, ideo intelligat, sed quia intelligit, ideo est, ita quod deus est intellectus et intelligere et est ipsum intelligere fundamentum ipsius esse.
- 54) Quaest. Par. I n. 4; LW V, 40, 12-41, 2: Relatio autem totum suum esse habet ab anima et ut sic est praedicamentum reale, sicut quamvis tempus suum esse habet ab anima, nihilominus est species quantitatis realis praedicamenti.